

点字は覚えやすい。しかしこれを読むという段階までくると、私のように舌と唇を用いる者にはかなり様子がちがってくる。本来の機能とはまったく別の働きを、舌や唇に強制しようというのだから無理を生じるのは当然で、かんたんはずの五十音も、はじめてこれをよみとろうとする舌や唇には、ただ粟粒のざらざらしたかんじしかない。与えられた一年生の教科書の一页には「はな」とだけ点字で大きく記してあり、二頁、三頁には「いぬ」「ねこ」「おとうさん」「おかあさん」「あかかてしろかて」といったたぐいのかんたんな単語がしるしてあり、そんな文字さえよみとることがむつかしい。講習会における私と五郎とは、いつもおくれがちというよりも、みんなについて行くのが精一杯であった。

私は自分の生活のリズムをかえた。講習会への出席はもちろんのこと、起床から就寝まで、食事と治療と楽団の時間以外は、文字通り寸暇をさいてこれをまさぐり続けた。長時間機の前にすわっていると、肩や背や腰がいたむので、時々立ち上がっては柱にもたれながらこれをよみ、だれもない時には体のしこりをほぐすようにして、部屋の中を歩きながらも、これをはなさなかった。唇は敏感であった。毛ほどのほそいものでも感じとることができるが、逆に風邪をひいたり、胃の調子がわるいときには、たちまち感度が鈍くなる。舌先もまた同じであってこの場合には、唾液の分泌が伴うので一層困難であった。一日のうち、唾液の分泌がいちじるしくさかくなるのは、食後と体が汗ばんでいる時であって、そのまた反対もある。つまり胃袋が食べ物で消化し終るところから空腹時にかけてがそれだ。多すぎてもこまるが、少なくともまた一層よみにくいというわけ、こうした生理的現象をコントロールしながら、私は舌先と唇とを適当に使い分けすることをおぼえていった。一週間、十日はまたたく間にすぎ、私の時間は急速に回転していった。

そんなある日のこと、同室の老人が私の点字本をのぞきこみながら、

「これはどうした。まっ赤じゃないか。」

と言う。血であった。唇の皮膚はやぶれ、舌先は赤くただれているという。二、三日前から、その局部にいたみをかんじないわけではなかった。やはり私にはむりだったのか、と言い知れぬむなしさが心のすみからこみ上げてくる。しかしやめられない。あの十二名の仲間たち私の楽団、今やめたのでは悲しみと後悔とが生涯私の中には残るにちがいない。試練とはこうしたものだ。私は自分をむちうつしかなかった。点字は本来目でみるものではない。従ってあのひらがなの流れるような美しさや、漢字の持っている重量感などおおよそ視覚による美しさはない。ましてひらがなと漢字の微妙な使い分けや、その意味の広さなどももちろんない。点字がよめるようになり、特に詩や短歌や俳句などの文芸作品にはじめて接するとき、こうしたとまどいをかんじるのは私一人ではないことを思う。